

[3] フィリピの信徒への手紙 1 章 3 節-11 節
「共に恵みにあずかる者」

《1》

私たちの喜びは、どこから来るのでしょうか。喜びは、嬉しいことや楽しいことがあるとき、あったときに感じる、というものでしょう。辛いこと、悲しいことがあったときには喜べない。これが普通の反応です。

すると、それは状況とか出来事など、自分の外にある事柄によって、すべて左右されてしまっている、ということにもなるでしょう。一喜一憂という言葉があるとおりに、あるときには喜び、楽しんで、やがてまた憂い、悲しんでいる。

それが人生ではないか、という考えもあるかもしれません。喜びや悲しみが、いわば私たちを待ち構えている。だから、なるべく多く、喜ぶために、ふだんから努力する。勉強したり、運動したり、貯金したり、教養を積んだりして、備えていく。

それで、喜びと悲しみとを収支計算書のように書き上げて、喜びの方が多ければ、これで満足すればよい。満足するしかない、ということになるのでしょうか。

しかし仮に、このような人生のプラスマイナス計算をしてみても、プラスの方が多ければ、それでよい、と考えてみたところで、このような考えには決定的な難点があります。

あのルカによる福音書 12 章の譬え話に出てくる愚かな金持ちのことを考えてみましょう。

彼は人生のプラスマイナス計算をして、プラスになると安心したんですね。当初、倉に納めきることのできないほどの穀物をどうしよう、と悩んだのですが（ここに彼の貪欲が見られます）、そうだ、もっと大きい倉を建てて、そこに穀物や財産をしまい込もう。そうすれば、あとは食べて飲んで人生を楽しめばよいのだ、と思った。

しかし、その時、神さまが彼に現われて、言われます。「今夜おまえの命は取り上げられる。おまえの用意した物は一体誰のものになるのか」。これでは人生はマイナスで終わってしまうでしょう。

この譬え話でも明らかなように、喜び、楽しみ、嬉しいこと。このようなことは、いつまでも続くものでなければ、結局は憂うべき、悲しむべきこととなって、虚しく終わってしまいます。

それで、いつまでも続く喜びは、どうしたら手に入れることができるのか、ということになります。

それは、自分の気持ち次第だ、心がけ次第だ、という考えもあるでしょう。

心頭滅却すれば火もまた涼し、といったことでしょうか。でも、これは結局のところ痩せ我慢をしているか、喜びは無いものとして諦めているか。どちらか、ということになってしまうのではないのでしょうか。

ですから、自分の心がけ次第だ、というようなことでは、あやふやで、危なっかしくて、とてもその考えを頼りとしたり、これに命を懸けて大丈夫、というようなことにはなりません。

すると、自分の気持ち次第でどうこうするというのではなく、やはり、自分とは別に、自分以外の確かなもの、客観的に在るもの。これを頼りとして、これで喜ぶのでなければ、本当の喜びを得ることはできないということでしょう。

その時初めて、目先の状況に左右されることなく、揺らぐことのない喜びが与えられることにもなります。

あのチャーリー・チャプリンは、「人生は近くから見たら悲劇だが、遠くから見たら喜劇だ」と言ったそうです。日々の生活に追われるようにして、あくせくと働いている。その中で、厭なこと、困難なことなども降りかかってくる。こんなことがあると、自分はまさに悲劇のどん底にいるかのように感じるものです。

今のコロナ感染症で苦しんでいることでも、そうですね。まさに苦しみだけに包み込まれているようにすら見えてしまうかもしれない。

しかし、それはいわば日々の暮らしの中に、自分が没頭しているからです。没頭というと、良い意味でも使われますから、ここでの意味は少し悪い意味で、日々の生活の中で、自分を見失っていると言ったほうがよいかもしれません。

自分だけではない。他も見えない。遠くから見ることができないからです。私たちは、自分と自分の生活を現実に遠くから見ること自体は、確かにできません。

しかし、遠くからの視点を得ることはできます。自分を、客観的に、少し遠くから見る。そのとき、身の回りのことで忙殺され、振り回されている自分を、もう少し冷静に、落ち着いて、眺めることができるのではないのでしょうか。世の中も、もう少し冷静に見ることができるでしょう。

そして、これが人生には必要である。それも、絶えず喜びをもって生きる上では、欠かすことのできないことです。

《2》

では、そのような視点は、どこに置くべきものでしょう。どのようにして、今の自分を眺めたらよいのか。

イエスさまは言われました。マタイによる福音書 6 章 19～21 節「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは虫が食ったり、さび付いたりするし、また盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は天に積みなさい。そこでは虫が食うことも、さび付くこともなく、また盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」。

富のあるところに、心もある。富とは、大切だと思うこと、価値あること、望みをかけているところ、これさえあればすべて大丈夫と思えるところ、といったようなことです。

「心」は、ここではその人自身。その存在全体ですね。

私たちは何に望みをかけたらよいのか。何が何でも大切にしなければならないもの、これさえあれば、どんなことがあっても大丈夫だと言えるものは、何か。

御言葉は、富は地上に積むのではなく、天に積みなさい、とあります。地上のことを頼りとしても、それらは結局虫が食い、さび付いてしまう。すべてが空しく、忘却

の彼方に打ち捨てられてしまうということでしょう。

天に、あなたの心を、つまりあなたの存在すべてを置きなさい。それはつまり、天に視点を置くこと。絶えず、御言葉と祈りをもって、主イエス・キリストと共にあることです。そのことから、自分を、隣人を、そして世界を見なさい。

そのとき、そこに見えてくるのは、喜びである、ということになるでしょう。

パウロは7節で、「私があなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です」と語ります。当然である、というのは、「正しい」とも訳すことができます。

「このように」というのは、どこを指しているかと言えば、直前の3節から6節の全体を指しているのでしょう。

改めてこの箇所を読むことはしませんが、——こういうことですね。あなたがたのことを思い起こす度に神さまに感謝し、常に喜びをもって祈っている。それは、あなたがたを救われた主は、終わりの日まであなたがたをその信仰のうちに、堅く守り、育ててくださるからである。主にあって、救いは確かである。だから喜んでいる。

そして、今朝の7節で、私がそのように考えるのは、当然だ、正しい、というわけです。

ひと言で、フィリピ教会の人たちが信仰をもって救われて、生きている。このことが嬉しい。いわばこれだけで、喜びである、とパウロは言うのですね。

7節の続きで述べていることも、この延長線上で述べていることだ、と言ってよいでしょう。

「というのは監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思って、心に留めているからです」。

監禁と言われています。パウロはこの時、監禁された状態にありました。恐らくローマにおいてのことでしょう（伝統的な見解）。

福音を弁明し、立証するときというのは、広く福音の宣教をしている時は勿論、ローマの高官などが迫害し、また尋問するのに対して福音を擁護し、その正しさを訴えているような時です。そのような時も含まれるでしょう。

つまり、どのような時にも、です。常に、あなたがた一同のことを共に恵みにあずかる者と思っている。「共に恵みにあずかる者」というのは、「一緒になって恵みを共にしている者」です。パウロもフィリピの人たちも、それぞれに、同じ恵みに生かされています。

端的に、辞書にはパートナーとも訳されていました。配偶者という意味ではないパートナーですから、いわば「相棒」ということにでもなるのでしょうか。

同じ神さまの恵みに生かされて、同じ目的のために働いています。それは福音のため、救いのため、伝道のため。要するに、父なる神さまと主イエス・キリストのためです。

恵みに生かされるとは、また、恵みのために働くことです。それで、パウロもフィリピの人たちも、相棒として、恵みのために働いている。そこに、主にある兄弟姉妹の、交わりも生まれます。

教会の交わりというのは、たまたま同じ信仰をもっている者たちが近くにいるから、一緒になって何かをやっ払いこう、楽しい時を過ごそう、というだけのことではないですね。もしそうであれば、そのような交わりはいずれ破綻するでしょう。

主イエス・キリストを中心とする交わりでなければならない。それは、自分たちの真ん中に主イエス・キリストがおられることを、しっかりと弁えていることです。

事実そのとおりなのですから、そのことを強く意識して、覚えていなければならない。自分が今、兄弟姉妹たちと共に、主の前にある、ということです。そうであれば、人間的な思いや感情は正しく制御しなければならないと考えるでしょうし、語る言葉、行なう働き、そのいずれもが聖く、真実なものとなるでしょう。

お互いにそのような者として、いわゆる交わりをはじめ、教会で行われるすべての働き（礼拝、教会形成、伝道、証し、奉仕…）を、共に行っていく。

そして、そのような姿こそ、主イエス・キリストの恵みに生かされ、喜びに生かされている姿だ。パウロはこう言うのです。そして、私は喜んでい

共に恵みにあずかる者であることを喜んでい

《3》

そして、その喜びは、また、あなたがたに対する愛と共にある。このことをぜひ覚えてほしい。8節でパウロは、そのように続けて述べています。

「私が、キリスト・イエスの愛の心でああなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてください」。

「キリスト・イエスの愛の心で」とあるのですが、これは、イエスさまが愛しておられるその愛と同じような愛で（強さ、深さ、など）、あなたがたを愛している、ということではないでしょう。イエスさまの愛ほどの愛を、私たち人間がもつことはできません。

ここでの意味は、主イエス・キリストがフィリピの人たちを愛しておられるように、私もあなたがたを愛している、というほどの意味になるでしょう。

なお、ここで「愛。愛の心」と訳されている言葉ですが、これは普通にギリシア語で使われる「愛」（アガペーなど）という言葉とは、別の言葉が使われています。

スプラクノンという言葉で、もともと、はらわたとか内臓といった意味の言葉です。当時は、はらわたが人間の感情を生み出し、またコントロールしているところと考えられていたといわれます。今で言えば、「心」がこれに相当するでしょう。

この言葉で思い起こすのは、ルカによる福音書7章にある、ナインのやもめの一人息子が、主によって生き返ったという奇跡です。

イエスさま一行が、ナインという町の門に近づかれると、ちょうど、棺が担ぎ出されるころであった。或るやもめの一人息子が死んで、葬られようとしています。

このとき主は母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われます。そして、その言葉のとおり、死んだ若者を生き返らせてくださいました。

ここで主が「憐れに思い」と訳されている言葉が、このスプラクノンという言葉の動詞にあたる、スプラクニゾマイという言葉です。同じような言葉が派生して、

二つの言葉になっています。動詞としては、「同情する、憐れに思う」と訳されますが、そこには激しい感情の高まりがあります。それは、はらわたが千切れるほどの痛みを伴う、共感と言ってよいでしょう。

このようないわば激しい意味を持つ言葉として、フィリピ 8 節の「キリスト・イエスの愛、愛の心」ということが言われています。

ですから、これを愛と訳してもよいし、また、同情とか、共感といってもよいのですが、いずれにせよ、とても強く、激しい思いが、ここには込められている。このことに留意しておきたいと思います。

そして、パウロの激しいまでの愛、これは神が証ししてくださる。

愛というのも、人間的なものであるなら、敢えてここで語るまでのこともないでしょう。しかし、この愛は、神さまが作り出し、パウロに与えてくださっている愛です。

ですから、その愛は神さまご自身が証ししてくださる。そのような愛、共感をもって確かにパウロはあなたがた一同のことを思っている。このように、証ししていただきます。

なお、「思っている」と訳された言葉ですが、これはしばしば、思い焦がれる、切望する、憧れる、といったような言葉で訳されてもいます。

このようにパウロは、フィリピの兄弟姉妹たちのことを、共に恵みにあずかる者として、常に喜んでいきます。愛をもって、同じ主の御前に一つとなり、主にある交わりの中で、生きています。

それは、自分が今、どのような状況のもとにあるか、ということを超えています。たとえ獄中であろうと、それは変わりません。

主イエス・キリストは確かにおられる。私たちの外に、確かにおられる。そして、御霊において私たち一人一人の内に、絶えず共にいてくださいます。これは確かなことです。

この御方に拠り頼んで生きる。自分の思いとか、力によるものではありません。主イエス・キリストにある、揺るぎない恵みです。これがあります。

ですから、喜びがあります。私たちは感謝しつつ祈りつつ、歩み続けるのです。

2021年9月5日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

罪の内に歩んでいた私たちは、また、本当の喜びや幸いを知ることがありませんでした。しかし、主イエス・キリストにおいて、確かな恵みが現され、私たち一人一人に恵みが与えられ、今も恵みが注がれ続けていますことを、心より感謝します。

こうして、私たちは本当の喜びも知りました。

共に恵みにあずかる者として、どうか私たちがこれからも、神さまの御前を、喜びと感謝をもって歩みゆく者とされますように。

御手に委ねて主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司